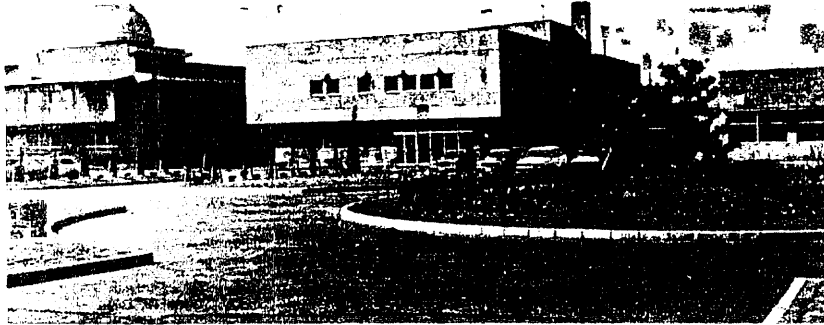


教育センターだより

第17号



目	次
教育実践の充実発展をめざして……	1
教育研究部	
経営研究室 ……………	2
教科研究室 ……………	2
教育相談研究室 ……………	2
教育工学研究室 ……………	2
科学技術研究部	
理科研究室 ……………	3
技術家庭研究室 ……………	3
満10歳をむかえた理科実験カード…	3
研修員とテーマ紹介 ……………	4
県内教育研究機関協議会 ……………	5
随 時 研 修 ……………	5
告 知 板 ……………	6



初夏の午後の日ざしを受けたこの教育センターに、隣接の高校の放課を告げるチャイムの音が静かに響いてくる。間もなく、生徒達が校庭にその姿を見せることだろう。その高校で11年間教べんを執る機会を得た私にと

学力を見直そうとしている。このような最近の人間復興の教育動向の中で、教育課程の改善が叫ばれておるが、何よりも重要なことは、教育現場での具体的実践をふまえた研修と研究の成果が、日常の授業にどのように反映されているかということなのである。

県教育センターのスタッフ一同は、こうした喫緊の課題に懸命に取り組んで日々を過ごしているのが現状である。たとえば、学校現場の情報収集のために、県内外の教育機関との組織的な情報活動や現場との共同研究、また、研修

って、この土地は＝現在は郊外の急激な都市化によりその様相は大きく変貌したにもかかわらず＝

教育実践の充実発展をめざして

教育研究部長 三浦 智 孝

今でも当時のほつらつとした教え子達の顔や同僚の先生方の姿がほうふつとして生涯忘れ得ぬ「心のふるさと」のような気さえしている。それは「単なる情緒的、懐古的な甘い感傷ではなく、むしろ、能率化され合理化されつつある現代社会にあって、とかく見失われがちな人間そのものの回復」(学校教育の指針)としての、郷土意識にも似たものが、心に潜んでいるかのようである。

この4月、当教育センターに赴任以来じっくりと教えることの意義を考える機会に恵まれ、教育のもつ意味の重さと、教育に寄せる社会の期待に応え、まず、何よりも教師としての厳しい自己評価を先決条件として、そこから出発すべきだと考えている。

今から、6年半前に、県民の要望に応じて、旧教育研究所と旧理科教育センターを統合して発足したこの教育センターは、今日さらに大きな任務を持つ時期が来たといえよう。今教育界は、戦後最も大きな教育改革の秋を迎えているように思う。経験主義学力観から科学的系統的学力観へ、さらに今、人間的見地からの

講座などのあらゆる機会を利用し、努力を重ねている。さらに現場にとって魅力ある研修講座にするため、年間90におよぶ講座や随時研修講座の実施方法を慎重に審議し、実技内容を主体とした演習や研究協議の機会、および受講者の発表活動の機会等の時間を増加したり、全受講者よりの感想文を通して、次年度講座、所員研究の参考資料にしたり、さらには、OHP・VTRなどの機器利用などさまざまな方法をとって創意工夫を凝らしている。

このようにして、現場と教育センターとが、手を結びあって得た問題点をテーマにして、その成果を毎年2月初旬の所員研究発表会で、公開発表をしている。

今、私達は、「児童生徒が、温さときびしさの調和の中で学習するよろこびと充実感が得られ真にゆとりのある」教育実践の充実発展をめざして、全力を傾注し、秋田県教育の振興を図りたいと、念願するとともに、関係機関各位ならびに諸先生方の御助言、御協力を心からお願いする次第である。

教育の今日的課題の究明をめざして

各研究室の構想

合理的な経営のあり方を求めて

経営研究室

学校経営、学年・学級経営、学校評価法、へき地教育、その他教職教養に関するものなど講座としては教育経営上マクロな面の企画と実施を担当している。

- ▷ 学校経営、学年・学級経営研修講座では科学的合理的経営のための企画—実践—考察のプロセスを重視するとともに、学年・学級経営を学校経営と同質の存在としてとらえてサブ・システムの構築を具体化することに力点をおいていきたい。
- ▷ 10月には本県で全国へき地教育研究大会が開催される。“へき地教育研修講座。”では複式学級を、“まとまりのある一つの学級。”とする学級観に視点をおいて研修する。
- ▷ 教職教養研修講座では秋田市立八橋小・高清水小・城南中・高清水中、県立秋田工業高校・壘学校、へき地教育研修講座では協和町立大盛小の学校参観を組み入れ教育実践に即した内容を企画している。
- ▷ 複式学級の児童を対象とした“複式学習資料。”の作成と無償配布を企画し準備をすすめている。

郷土教育資料（歴史編）の刊行

教科研究室

「ひらけゆく秋田」につづく郷土教育資料（歴史編）を、本年度末刊行予定で編集をすすめている。歴史学習における教材化に活用いただきたい。

各教科の研修講座内容 ・国語科では、説明的・文学的文章を通して教材研究、作品研究と授業研究の面から研修を実施し、毛筆書写実施講座も小・中全県一本で行う。 ・社会科は、歴史学習における教材精選を小・中・高一貫の立場から研修する。 ・算数・数学科では、算数・数学の考え方と教材の見かたについて小・中・高種別に研修を行う。 ・音楽科では、高校での「日本の伝統音楽」の指導について考え、中学校はギターの奏法実技とML、小学校はリズム指導とパーカッションの基礎奏法について行う。 ・図工・美術科では、立体教育の充実をめざし、作るよろこびをあじわわせるよう教材や学習のあり方を研修する。 ・英語では、言語運用力の強化を目標に、LLを通じた音声練習およびマルチメディアを使用した運用練習を徹底して行う。

「困った子」たちへのつきあい方を

教育相談研究室

考えるより子どもと会おう。ひとりにならず、みんなと動こう。これが相談室の合いことば。

子どもを見ないで助言しても効果はない。百の助言より、子どもといっしょになって、その子の目で世界を眺めてみることだ。そのときはじめて子との心の交流が生まれ、「困った子」は、その心を開きはじめる。

スタッフは常に人に対して心を開いていないと、子どもまた心を開いてくれない。ひとりで考えこむことは最も危険、常に仲間とおしで語り合う姿勢を持ってこそ、子と会うこともでき、親の話も虚心に聞ける。

例年どおり、生徒指導・進路指導・特殊教育・幼児教育関係の講座を担当します。主義は「知より愛」

研究は調査研究二種、事例研究二種、ともに継続。

相談活動、ご協力により盛況、今年も、自閉症児・登校拒否児、適応異常児の相談大歓迎。現場と協同して、アクションリサーチを続けます。親に紹介乞う。

ひとりひとりが生きていく学習をめざして

教育工学研究室

二年間の研究生生活を終え、教育現場に帰られた佐藤、鎌田両研究員のあとに、四月から新しく岡部、後藤両研究員、さらに当研究室として最初の研修員松橋英二教諭（観海小）を五月から迎え、室員4名の研究態勢に、一段と活気がみなぎっている。

ひとりひとりが生きる魅力ある授業の創造が、本県の学校教育指針の重点としてとりあげられているが、当研究室の研修講座の進め方は、なすことよって可能性を生ずをモットウに、前期には基礎理論と演習を中心に学習指導プログラムを作成し、いったん現場に戻り、現場でそのプログラムを実践し、その結果を後期に持ちよって更に検討、修正を加え、研修を深めるといふ見る、聞くことに行動化（実践）するという多段方式をとり入れた。

本年度の室の研究目標は、指導・学習両面からの評価をふまえ、学習者ひとりひとりの力をほり起こし、高めるための学習指導のあり方を追究してみることで、現在着実に前進している。

授業に直結した 実験・観察法の検討

理 科 研 究 室

理科学研究室の今年度の研修講座の数は、昨年度と同じ22講座であるが、その実施にあたっては、できるだけ学校や児童生徒の実態に即した内容を取り上げ、実際の授業に直結した実験・観察法や指導法の工夫などのほか、資料の提供などを加えて、今後の授業に役立てていただけるよう心がけている。

講座の中で昨年度と変わっている主なものをあげると、これまで指名講座であった野外観察研修講座を今年度から希望者受講の講座とし、同時に、9年間続けた生物の乳頭山での山地植物の観察から、男鹿半島の海浜動植物観察にかえ、地学の岩見三内における研修では新しい観察地点を追加している。このほか基礎講座IIの化学のガラス細工では、高校理科実習助手の方々を対象として2日間の日程で行うこと、及び5～6月に行ってきた天体観測会を9～10月の秋の空の観測に変えたことなどがある。

また講座内容の中で、例えば物理関係の中学校現代化講座での「気体の圧力と体積・温度との関係」、高校のミリカンの実験、フランク・ヘルツの実験など、それぞれの領域で新しい内容を加えながら、受講の先生がたが日常持たれている問題点、もっと詳しく調べてみたいと感じている事から等を、じっくり研修していただきたいと考えている。

より充実した研修を

技術家庭研究室

3年ごとの計画ですすめてきた研修講座も、本年度第3次の段階に入り、各領域とも新しい分野の内容をとりあげ、当面する課題の解決を図りたいと考えている。内容については、すでに配布済みの教育センター研修講座案内の実施要項に示したとおりであるが、第2次と変わったのは次の点である。

- ① 小学校家庭科の日程が2日間になり、被服、食物とも各1日の研修となる。
- ② 中学校技術・家庭実技研修では、男子向けの日程が1日短縮して3日間になる。女子は昨年同様。また、男女とも共通研修が除かれ、全期間を領域の研修に当て、教育工学、指導法などについてはそれぞれの内容の中に包含していくことにした。
- ③ 中学校教材研修については、昨年は技・家研全国大会の関係から授業日に実施されたが、本年は夏休み中に実施するので、多数の受講を期待している。
- ④ 高等学校は従来どおりの日程で、内容はより現代の生活に密着した問題を取りあげ、家庭生活の向上に役立つ題材を選んでいく。

以上日程、内容については現場からの声も大いにとり入れ、充実した研修をとねがっている。

本年は食物担当が加藤佑子指導主事から船木菊子指導主事にバトンタッチされたことも併せて紹介する。

満10歳をむかえた理科実験観察カード



昭和41年度から毎年1冊ずつ発行されてきた小学校および中学校用理科実験観察カードは50年度の中学校用第6集で、小・中通算して10冊目となった。小・中それぞれ第1集は基礎技術編で、第2集以降の教材編が第4集(小)と第6集(中)まで誕生したわけである。合計すると小学校用(第1～4集)は75テーマ240ページ、中学校用(第1～6集)は72テーマ314ページとなり、10年という歳月の厚みに驚いている。

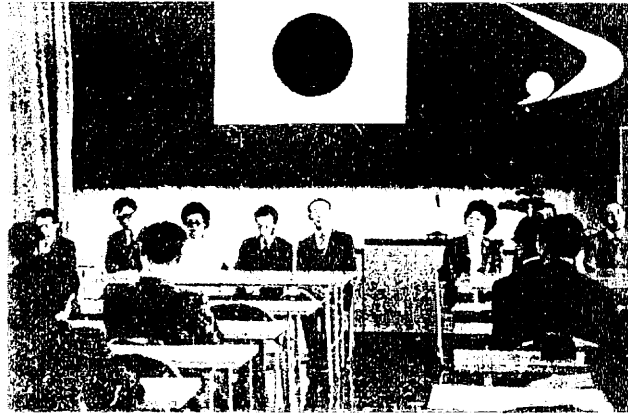
このカードは基礎的な実験観察や基礎技術ならびに実験観察に必要な資料等をカード式にまとめ、理科学習指導のガイドとして効果的、能率的に活用していただくために作成したものである。テーマ(題材)は指導にあたって困難がともなうと予想されるものからいくつか選定した。内容は実験観察の方法、参考資料などが主であるが、写真・図解を多くしてわかりやすいものにするとともに資料・データ・文献の紹介にも配慮したつもりである。おかげで、県内の先生たちに喜んでいただき、また、文部省教科調査官からも賛辞をちょうだいし、10年の積み重ねが報いられたような感じで意を強くしている。

各集とも学校に1冊ずつお配りしてあるので、あらためてこの活用方をお願いするとともに各方面からのご意見、ご要望を期待し、今後の伸展にそなえたい。

昭和51年度研修員とテーマ紹介

教育センターの事業のひとつとして、地域の教員の指導者養成を目的とした研修員制度は、115名もの多くの修了者を県内各地に送り出している。

昭和51年度の研修員入所式は、5月4日、菅原指導課長列席のもとに、当センターで行われた。



県内各地の小・中学校から12名、県立学校から4名、合計16名の現場経験の豊かな先生方がみえられた。

教学相半、笈を負う心意気で毎日の研修に励み、本県教育向上に寄与して欲しい。

と草薨所長の挨拶があり

教える立場にあるものは常に自ら学ばねばならな

経営研究室

- 組合立羽城中学校教諭 内田 鉄雄
中学校における生徒会活動の育成について
- 協和町立稲沢小学校教諭 熊谷 直紀
へき地・小規模校の特性を生かす教育計画について

教科研究室

- 大館市立東中学校教諭 船山 次男
歴史的分野における地方史教材について
- 本荘市立鶴舞小学校教諭 三浦 敏男
変換の考えをもとにした図形指導について
- 県立横手城南高等学校教諭 土田 忠明
古文（文学的文章）の読解力を高めるための文法指導のあり方

教育相談研究室

- 秋田市立牛島小学校教諭 伊藤 桂子
登校拒否児の実態と治療指導のあり方について
- 県立秋田養護学校教諭 熊地 富士夫
脳性まひ児の視覚発達のためのプログラム

い。この機会に大いに読書し、その道のベテランになって欲しい。

と菅原指導課長の激励のことばを受け、先生方は一層意欲を高めた様子であった。

9月末日までの5か月の研修が大きな、みの

りのある成果を取って終ることを心から期待したい。

先生方は、下記のようなそれぞれのテーマにもとづいて、計画に従って研修を進め、9月17日には研修成果の発表を行う予定である。

教育工学研究室

- 八森町立観海小学校教諭 松橋 英二
小学校算数科における教育工学的指導の一考察

理科研究室

- 鹿角市立大湯小学校教諭 大里 隆一
小学校における「水中生物」教材の検討
- 大内町立上川大内中学校教諭 近藤 達夫
中学校における気象教材の検討
- 横手市立横手南中学校教諭 塩屋 輝夫
力学的エネルギーに関する実験の検討
- 県立秋田南高等学校教諭 田中 昭司
化学反応式の係数（モル数）を指導するための実験法の検討

技術家庭研究室

- 合川町立合川中学校教諭 平川 次郎
屋内配線を題材とした学習指導について
- 湯沢市立山田中学校教諭 土屋 喜信
木材塗装に関する指導教材のくふう
- 男鹿市立船川中学校教諭 秋山 チャ
煮物指導に対する一考察
- 県立湯沢高等学校教諭 佐藤 千代子
素材を生かした縫製指導について

県内教育研究機関協議会

51年度総会・分科会から

51年度の県内教育研究機関協議会が4月30日センターで行われました。

この協議会は県内の教育研究所・理科センターによって組織され、年に1回定期総会を持ち、必要に応じて、臨時総会または分科会（教育研究所部会・理科センター部会）を持つことになっています。

今回の総会では、事務局（県センター）より、加盟各機関に対して、全国教育研究所連盟（全教連）または、東北・北海道地区教育研究所連盟（地区教連）に加盟するよう呼びかけがありました。ちなみに県内各機関では、県センターが両者に加盟しており、大曲市、森吉町、上小阿仁村の三研究所が地区教連に加盟しております。

総会に引き続いて、分科会が開かれ、理科センター部会では、例年のとおり、研究活動・研修活動を中心とした情報交換が活発に行われました。また、教育研究所部会では、情報交換の他、昨年度実施した共同研究「親子の人間関係に関する研究」の最終集約があり、さらに、本年度の共同研究のあり方をめぐって討議が行われました。

その結果本年度は、昨年度研究をいったん打ち切り、多くの機関が事業計画に盛っている、知能ならびに学力についての相関検査をできる限り、共通の条件で実施し、その結果について、来年2月ごろ研究交換の

会を持つことに決定しました。

県内における研究活動をより充実するため、当センターでは、今後も積極的に各機関の連絡調整等のお世話をさせていただき所存しております。

加盟機関一覧

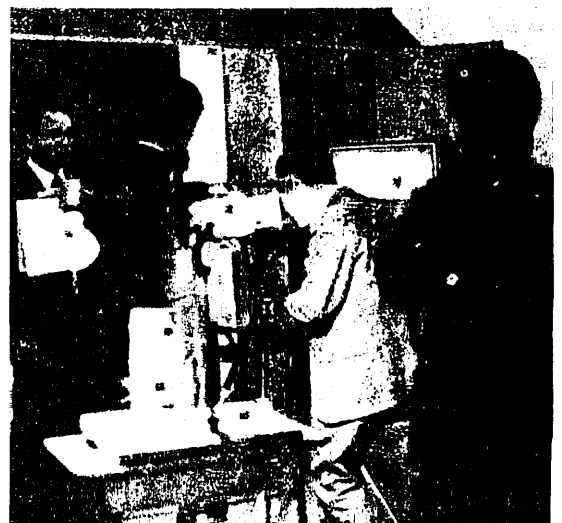
（専任者）

鹿角市教育センター	伊藤久和
鷹巣町教育研究所	山城勇幸
森吉町 "	五代儀喜久雄
合川町 "	佐藤与志雄
阿仁町 "	石崎長
上小阿仁村 "	田中重治
本荘市 "	長谷川純一
大曲市 "	福田健治
協和町 "	加藤雄一
鹿角市理科教育センター	沢口茂昭
鷹巣町 "	渡辺進
男鹿市 "	三浦進
本荘市 "	相庭廉
大曲市 "	板垣耕治郎
横手市 "	渡部五佐男
湯沢市 "	千葉剛道
秋田県教育センター	田沼浩三
	向山清

昭和50年度 随 時 研 修

随時研修は、教育工学関係が13回、家庭科関係が5回、教育相談関係が1回と、計19回実施し、受講者の延人員は615人となっている。おもなものをあげると次のようである。

研 究 室	研修会名またはテーマ	要 請 者
教 育 工 学	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導プログラム作成とそれにもなうTP製作 ・高校産業教育講習（職業高校教師）TP製作 ・学習指導プログラムの作成とTP製作 	鹿角市教育センター 県教育庁指導課 小坂町教育研修会
技 術 家 庭	<ul style="list-style-type: none"> ・高校家庭技術検定評価講習会（被服・食物） ・被服研修講座 	検定事務局、 ニッ井高校 高校家庭部会
教 育 相 談	<ul style="list-style-type: none"> ・特殊教育研修会 	河辺町





人事異動

所 員

〈転任〉

教育研究部長 小貫山達夫 大館桂高教頭へ
 経営研究室長 荒川 浩司 学務課管理主事へ
 教科研究室長 菊地 昭男 井川中学校長へ
 指導主事 沢田石三津雄 中央教育事務所指導主事へ
 " 加藤 佑子 城南中教諭へ
 実習助手 阿部 愛夫 秋田北高実習助手へ

〈退職〉

嘱 託 奈良 寅吉

〈新任〉

教育研究部長 三浦 智孝 六郷高教頭から
 指導主事 今井 敏雄 神宮寺小教頭から
 " 山本 象 中仙中教諭から
 " 工藤 富雄 中央教育事務所指導主事から
 " 船木 菊子 秋田東中教諭から
 実習助手 土橋 幸子 秋田高実習助手から
 嘱 託 田中 芳夫 大盛小校長から

〈所内〉

庶務係長 熊谷 善一 庶務係主任から
 経営研究室長 三浦 万蔵 指導主事から
 教科研究室長 渡辺 昭次 "

研究員

〈転出〉

教育工学研究室 佐藤 次男 秋田市教委指導主事へ
 " 鎌田 義雄 旭川小教諭へ
 理科研究室 渡辺征二郎 大曲中教諭へ
 教育相談研究室 板垣 栄子 築山小教諭へ

〈転入〉

教育工学研究室 岡部 隆 城南中教諭から
 " 後藤 晃男 大曲中教諭から
 理科研究室 高桑 昭 外旭川中教諭から
 教育相談研究室 原 香子 壘学校教諭から

「研修講座案内」の管理のお願い

本年度から、研修講座の要項を、受講の方たちに直接お届けせず「研修講座案内」という冊子にまとめて、各学校に2～8冊ずつ配布しております。保管管理方お願いします。特に6頁までは来年度以降も使いますので、年度変わりに紛失せぬようお願いします。

来談状況と来所のおすすめ

教育相談研究室から

50年度の来談実績は下表のとおりです。登校拒否を中心とする非社会的な異常行動への相談・治療依頼が増加しています。例年どおり、電話だけで受けまますので、気軽に申し込まれるよう、親たちにおすすめてください。(無料)

主 訴	知能障害	登校拒否	言語障害	夜尿車酔	反社会性	自閉症	行動異常	進路適性	他	計	面接延数
件数	31	39	26	24	17	8	67	7	4	223	2152

全県児童・生徒理科研究発表大会について

当センターで毎年開催しているこの大会は、県内小・高等学校児童・生徒の自主的な研究活動を奨励し研究成果を発表し合って、お互いの発展向上に役立てようとするものです。小・中学校の場合は発表数が多いこともあって、地区ごとの発表会を経て参加するのが普通ですが、昨年は、小学校54、中学校39、高等学校15の発表があり、研究内容・発表技術ともさすがに立派なものばかりで、活気に満ちた大会でした。今年も下記の期日に実施します。詳しくは後日、実施要項を配布しますので、よろしくご協力願います。

小学校 11月9日(火)
 中学校 11月10日(水)
 高等学校 11月11日(木)

昭和51年度 所員研究発表会の開催

- 期日 昭和52年2月3日(木)
- 発表者 三浦室長(経営)、石郷岡指導主事(教科)、木村指導主事(教育相談)、吉富室長(教育工学)、佐藤指導主事(理科)、野尻指導主事(技術家庭) 以上6名
- 日程 全体会と分科会の予定
- 刊行 研究紀要第8集に掲載する。

◆編集後記◆

当センターでは、教職員の教育営為に資する研修講座、研究等に努めているが、本号は「教育の今日的な課題の究明をめざして」と題し、各研究室から本年度の研修方向を提示してもらい、今後の学校教育と研修に生かしていただければという配慮のもとに編集した。

教育センターだより 第17号

発行年月日 昭和51年6月10日
 編集責任者 秋田県教育センター
 秋田市仁井田緑町4の2